



→
桜川市真壁から見た筑波山 (撮影:平成 25 年 11 月)



←
霞ヶ浦から仰ぎ見る筑波山。湖岸に広がる街並みは土浦市。市街地左端の高い建物が「ウラビル」です。(撮影:平成 25 年 11 月, 阿見町から)

校歌に謳われた「筑波山」(その 1)

「♪…関八州の重鎮とて そそりたちたり筑波山…」と本校生が歌う筑波山。ある調査によれば、県内の県立高校の 80 校以上の校歌にも謳われているといえます。また、小紙 53 号では、明治 43 (1910) 年 10 月の高田保氏 (中 12 回卒) による「筑波登山」を紹介しましたが、旧制中学校時代以来、「遠足」「歩く会」等を通して、どれほど多くの本校生・先輩方が登ってきたのでしょうか。今回は余りにも慣れ親しむ「筑波山」の歴史や自然などについて取り上げてみたいと思います。

筑波山

私たち茨城の県南・県西地方の人間にとって、筑波山は、まさにシンボルです。筑波山は決して独立峰ではなく、八溝系の南端に位置しています。しかし、その姿は、見る角度によって独立峰にも見え、また、様々な形を呈することから、まさに「我が筑波山が一番!」との声がいっぱい聞かれるところなのです。

筑波山は、西側の男体山(標高 871 m)と東側の女体山(標高 877 m)からなり、雅称を紫峰といいます。

筑波山全域が水郷筑波国定公園に指定された保護エリアで、中腹から山頂付近は特別保護区(自然公園法)に指定され、樹木の損傷・植栽、動植物の捕獲・採取、たき火などの行為が禁止されています。『万葉集』にもしばしば登場し、日本百名山、日本百景の一つとされており、開聞岳(鹿児島県・標高 942 m)とともに 1000 m 未満の山で、百名山では、最も標高が低い山です。

男体山・女体山の山頂には筑波山神社の本殿があり、山腹には拝殿があります。また、関東平野を一望するロケーションの良さから、アマチュア無線用中継局筑波山レピータをはじめとして、気象観測や無線通信の上でも重要な拠点とされ、山頂付近には数多くのアンテナが存在しています。

なお、余談ながら、太平洋戦争劈頭の真珠湾攻撃の実施を命じる隠語は「ニイタカヤマノボレ」として有名ですが、あまり知られてはいないものの、攻撃中止の際は「ツクバヤマハレ」であったといえます。

筑波山では、古来より農閑期の行事として歌垣が行われ、近隣から多くの男女が集まっては歌を交わし、舞い、踊り等を楽しむ習慣があったといわれます。これは、今年の豊穣を喜び祝い、翌年の豊穣をも祈願する意味があったのです。『万葉集』第 9 巻 1796 番収録の高橋虫麻呂の歌に、

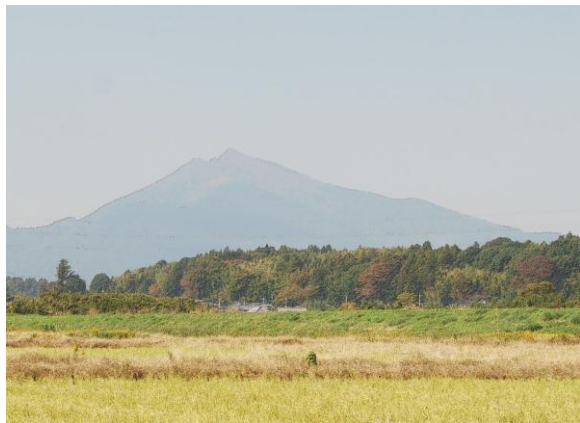
鶯の住む 筑波の山の 裳羽服津(もはきつ)の その津の上に 率(あども)ひて未通女(をとめ) 壮士(をとこ)の 行き集ひ かがふかがひに 人妻に 吾(あ)も交はらむ わが妻に 人も言問へ この山を 領(うしは)く神の 昔より 禁(いさ)めぬわざぞ 今日のみは めぐしもな見そ 言(こと)も咎む

と、歌垣への期待で興奮する気持ちが素直に、のびのびと、詠われています。

山名の由来については異説が多く、最も古いものでは、『常陸風土記』にある筑波命(つくはのみこと)という人物に由来するとの説ですが、史実とは考えにくく、学術的には次のようなことが考えられます。

- 縄文海進により、縄文時代の筑波山周辺には、波が打ち寄せていたと考えられ、「波が寄せる場」、すなわち「着く波」(つくば)となった。
- 縄文時代の筑波山周辺は海であり、筑波山は、波を防ぐ堤防の役割を果たしたため、「築波(つぎば)と呼ばれ、のちに筑波となった。
- 「つく」は「尽く」で「崖」を意味し、「ば」は「端」を意味する。
- 新たに開発して築いた土地として、「つくば」は、「築地」ないし「佃地」を意味する。

- 「つく」は、「斎く」(いづく、神を崇め祀る)、あるいは「突く」(つく、突き出す)であり、「ば」は「山」を意味する。
- 「平野の中に独立してある峰」の意である「独波」にちなむ。
- アイヌ語の *tsuk-poo* (とがった頭) または *tsuk-poo* (刻み目) にちなむ。



かすみがうら市志筑から見える筑波山。土浦方面の筑波山に比べ、双峰の間隔が狭くなっています。手前は恋瀬川の堤防。

筑波山の成り立ちから歴史時代へ

ところで、この筑波山の成り立ちを見てみますと、はるか 1 億年以上も前のこととなります。

今から 1 億数千万年前の日本は、海底の隆起・沈降が繰り返えされた時期を迎えますが、筑波山もその例に漏れず、1 億 5 千万年ほど前、地上にその姿を現したと考えられます。いわば筑波山第一世の誕生です。山頂付近は黒色のハンレイ岩、山腹以下は白色のカコウ岩からなります。いずれも火成岩ですから、元来、地中のマグマが、固まって形成された岩石です。ただ、そのまま今日の筑波山に

なったわけではなく、その後、海底に沈下し、今から1億年ほど前、再び地上に姿を現すことになったといわれます。これが、筑波山二世の誕生です。

その後も日本列島では、大きな地殻変動を繰り返しながら、今日へと至ることになります。筑波山では、断層により二つの峰が形成されることとなります。20万年ほど前のことと考えられています。

やがて、人類が登場し、筑波山周辺でも人間の営みが展開していくわけですが、最後の氷河期が終わる縄文期を迎える1万年程前になると、温暖化による海進により、筑波山の麓まで海水が入り込んでくることとなります。しかし、このことは当時の人間にとつて、食糧としての魚貝を入手しやすくなったという点で、温暖化とともに住みやすくなったと言えます。同時に、大変活動的な環境をもたらしこととなります。筑波山から霞ヶ浦に至る洪積台地の縁辺に、多くの貝塚・住居跡が今日知られるところですが、歴史時代に入ってから筑波山は、いつも、この地域の中心にありました。

律令時代には、常陸国府中(現石岡市)から、筑波山塊の南を経て筑波山南麓に至りますが、そこには郡衙と称する役所が置かれました。その一部が、平沢官衙遺跡で、昭和50年にその重要性が知られ、5年後に国史跡として指定されました。平成5年からの確認調



つくば市内の国指定史跡「平沢官衙遺跡」。後方には筑波山が聳えます。

査を経て、施設等も復元され、平成15年から、遺跡公園として、一般に公開されるようになったのです。



石岡市園部川から仰ぐ筑波山。男体山が女体山の後ろに隠れてしまっています。(上)筑西市赤浜から眺める筑波山(左)

平安中期以降の武士が活躍する社会になると、筑波山は、荘園を巡る争いのもつただ中に置かれることとなります。10世紀に生じた「平将門の乱」の関係者の拠点は、いずれも筑波山の南麓から西麓に広がる沃野にあり、豊かな土地を巡つての一族の争いだったのです。乱後の筑波山麓は、将門の乱を制した、将門の従兄弟平貞盛の血筋が支配し、筑波山の南にある多気山を拠点とし、多気氏を名乗るようになります。多気山は標高120m余の山ですが、後に筑波山を仰ぎ、南から西には、一面、沃野を見晴らす戦略上の一大拠点です。現在も山頂付近には空堀や土塁、建物の礎石などが残されています。その後多気氏は、常陸大掾なる役職に就き、役職名から大掾氏を名乗るようになります。筑波山麓の一大勢力を維持していくことになるのです。

鎌倉時代になると、多気山の太掾氏の目と鼻の先にあたる小田の地を、恩賞と

して八田氏(後の小田氏)が獲得し、小田城を築きました。そして、大掾氏と八田氏は争うようになり、敗れた大掾氏の支配地は一族の馬場氏が継承しますが、拠点は現在の石岡に移り、多気城は寂れていくことになりました。代わって八田氏一族が、筑波山麓の一大勢力となつていきます。

なお、この時代、筑波山はしばしば和歌の題材となり、多くの歌集に載せられています。(『新古今和歌集』・『風雅集』・『続拾遺和歌集』など)

その後、鎌倉幕府滅亡後の南北朝の時代になると、小田氏は、下妻城主下妻氏・関城主関氏・笠間城主笠間氏らとともに、後醍醐天皇の南朝方につき、足利尊氏に従った常陸太田の佐竹氏と激しい戦いを繰り返しました。そして、南朝方の北畠親房が、南朝の正当性を強調した『神皇正統記』を著すのは、小田城から関城に滞在した時でした。

やがて、足利氏による足利幕府が成立しますが、筑波周辺の政情は安定せず、小田一族、結城一族、下妻の多賀谷一族、常陸太田の佐竹一族、宇都宮一族などが互いに争う状況が続いたのです。戦国期になると、越後の上杉謙信もこの地に出兵するなど、戦いは、限りなく続けられました。天正18(1590)年、当主小田氏治が敗死することによって、鎌倉時代から400年続いた名門も滅びることになり、まもなく、徳川家康によって戦乱の時代に幕が引かれ、筑波山一帯にも平和が訪れることになるのです。

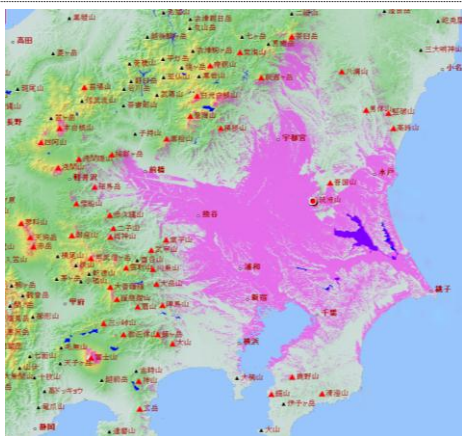
筑波山からの眺望

現在、筑波山頂からの眺望としては、

北は八溝山塊から、西に向かって日光男体山・赤城山・妙義山、秩父の山々から富士・箱根方面が広がっています。南は東京の高層ビル群から房総半島の山塊、東は霞ヶ浦から鹿行の台地、というふう

に、まさに関東一帯を眺めることが可能です。ただし、これらは冬の気象条件の整った時のことであり、多くの場合は、春霞の中に浮かび上がるように、かすかに見える場合がほとんどではないでしょうか!

次の図は、筑波山から見える範囲をあらわしたもので、地図上でピンクの地域が筑波山から見える範囲で、▲で示した山が見え、▲は他の山の陰になって見えない山です。(この図は、高21回卒・鈴木道信の作成によるものです)



「筑波山可視マップ」。中央の色の違う地域と、関東甲信地区の▲印山が可視範囲です。

日本館玄関天井壁が落下

10月31日・11月11日の地震により、下の写真のように天井壁が落下しました。ひび割れも広範囲になり、貴重な「漆喰装飾」さえ損壊しかねない状況です。早急な対策を関係方面に働きかけています。

